

2024.10.23
こどもの理解と相談支援

こどもの理解と相談支援
(第3回: 第9章～第11章)

聖和学園短期大学 保育学科
准教授 山本 信

1

授業計画

- 1 子どもの実態に応じた発達や学びの把握
- 2 相談支援の基本
- 3 こどもを理解する視点①
- 4 こどもを理解する視点②
- 5 こどもを理解する方法①
- 6 こどもを理解する方法②
- 7 こどもを理解する方法③
- 8 こどもの自己理解を進める技法
- 9 幼児・子ども理解とカウンセリング・マインド
- 10 幼稚園・保育園における園児への心理的援助
- 11 小学校における児童への心理的援助およびその保護者との相談支援
- 12 相談支援の実際①
- 13 相談支援の実際②
- 14 相談支援と家庭・学校・地域との連携と相談支援
- 15 相談支援の課題と対応

2

第9章
幼児・子ども理解とカウンセリング・マインド

3

第1節 教育現場におけるカウンセリング的視点

カウンセリング・マインド(≠ カウンセリング)

「個人およびグループと寸暇を惜しんでリレーションづくりをしようとする姿勢、つまり人間関係を大事にする姿勢」

≠ 「教師がどのようなときにも子どもを受け止め、決してしかってはいけない」

4

教師 ≠ カウンセラー

- 「教師」は、カウンセリングの技法・概念を知っているべきか？
知っておいたほうがよいか？
知らなくてもよいか？
- 「教師」として、大事なことは、何か？

5

教師 ≠ カウンセラー

- 「教師」は、カウンセリングの技法・概念を知っているべきか？
知っておいたほうがよいか？
知らなくてもよいか？
- 「教師」として、大事なことは、何か？

6

「受容」と「指導」

- 「受容」とは、何を「受け容れる」のか
- 「指導」 = Guidance(ガイダンス)
→ 教え導くこと
(強制的に何かを「させる」のではない)
- どんな時に「一人の人間として尊重されている」と感じられるのか

7

第2節 教育相談と生徒指導の違い

教育相談(学校カウンセリング・スクールカウンセリング)
児童生徒本人、あるいは保護者などに対して、望ましいあり方や方策について助言・援助を行う

生徒指導

一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の伸長を測りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動

- 「生徒指導的」な教師vs「教育相談的」な教師

8

第3節 教育相談の実践

教育相談活動の内容

- 児童生徒への援助
- 教師や保護者への援助
- 学校組織への援助
- 心理・教育アセスメント

9

三段階の教育相談的援助

一次的援助:すべての教師がすべての生徒に
発達課題 / 援助を求めるサイン / 適切な援助
エンカウンター / アサーション / SST / ピア

二次的援助:すべての教師が一部の生徒に
申告な状況に陥る可能性のある生徒が、自らの
力で「問題」を乗り越えられるように

三次的援助:専門家(専門機関)が一部の生徒に
深刻な課題(いじめ、不登校、暴力、トラブル等)

10

アサーション・トレーニング

「相手を尊重しながら自己主張すること」

- ①非主張的(自己主張できない)
 - ②攻撃的(一方的な自己主張)
 - ③アサーティブ(相手も自分も大切に)
- 「消しゴムを勝手に使われてしまったとき、どのように相手に気持ちを伝えるか」

11

ソーシャルスキル・トレーニング(SST)

認知行動療法(認知療法)

従来の「行動」に焦点を当てた「行動療法」

→ 思考など認知に焦点を当てる

思考や行動の癖→認知・行動のパターンを変化

- たとえば？

12

発達相談
乳幼児期の心身の発達に関わる問題について、相談・助言する実践活動

どのように教育・保育の条件や内容を変えていけば、発達の萌芽を引き出せるのか

13

「問題行動」について
「問題」は「どこ」にある？
「発達障害」

14

第10章
幼稚園・保育園における園児への心理的援助及びその保護者との相談支援

15

第10章のポイント

- 保育カウンセリングの意義
- 子どもの発達の特徴
- 保育カウンセリングにおける基本的な心構え
- 保護者との相談支援

16

第1節 保育カウンセリングの意義

保育カウンセラー
乳幼児の発達上の問題解決と発達促進に関わる援助的な働きかけ

- 「〇〇カウンセラー」
チャイルドカウンセラー
保育心理カウンセラー
幼児心理カウンセラー
キンダーカウンセラー etc.

子どもにとって、保護者にとって必要な「支援」とは

17

エリクソン
人格の成長・発達を8つの発達段階からなるライフサイクルとした捉えた。


各段階にある
○ 心理・社会的危機
○ 課題
を克服することで人格が成長していく

老年期 (65才～)	知恵	自我の統合	絶望
壮年期 (40～65才)	世話	世代性	自己停滞
成人期初期 (22～40才)	幸福・愛	親密性	孤立
思春期・青年期 (13～22才)	忠誠心や帰属感	自我同一性	役割拡散
学童期 (6～13才)	自己効力感	勤勉性	劣等感
幼児期後期 (3～6才)	目的をもつこと	積極性	罪悪感
幼児期初期 (1才半～3才)	意志	自律性	恥や疑惑
乳児期 (0～1才半)	希望	基本的信頼感	基本的不信感

18

乳児期（0～1歳）
 基本的信頼感 v s 基本的不信感
 → 希望（or 引きこもり）
 + 他人や社会を信じて大丈夫という「信頼感」
 - 多少の「不信感」（悪い人を信じ過ぎないために）


幼児前期（1～3歳）
 自律性 v s 恥、疑惑
 → 意志（or 強迫）
 + 「知りたい」「やってみよう」（イヤイヤ期）
 - でも、うまくできない（成功体験だけでも×）



19


幼児後期（3～6歳）
 積極性 v s 罪悪感
 → 目的（or 制止）
 + 「積極的な行動（あれもしたい・これもしたい）」
 - 思い通りにならない（衝突・競争）・不安（怒られるかもしれない）

学童期（6～12歳）
 勤働性 v s 劣等感
 → 有能感（or 不活発）
 + 「できる」ために頑張る（工夫・努力）
 - 「自分はダメだ」「頑張っても意味がない」



20


青年期（12～20歳）
 自我同一性 v s 同一性拡散
 → 忠誠心（or 役割拒否）
 + 「アイデンティティ（〇〇である自分）」の確立
 「同一化（憧れ）」→自分と他者の「違い」→「本来の自分とは？」
 → 「モラトリアム」
 - 孤独感（自分は受け入れられているのだろうか）
 - 迷い・動揺（自分はこれでいいのだろうか）
 - 「何をすればよいかわからない」
 - 「自分がわからない」
 社会の中で自立した一人の人間として、
 生き方を選択するために、自分と向き合い、
 確かな自分を新たに作り変える時期



21

前成人期（20～30歳）
 親密性 v s 孤独
 → 愛（or 排他性）
 + 社会・友人・恋人など、信頼できる人物との親密な関係
 - 価値観のゆらぎ、受け入れてもらえない不安・恐怖


成人中期（30～65歳）
 生殖性（世代性） v s 停滞
 → 世話（or 拒否）
 + 自分が培ってきたものを子どもや後輩へ伝える（後輩から求められる）
 - 自己満足・自己陶醉（頑固）



22

老年期（65歳～）
 統合 v s 絶望
 → 知恵（or 侮蔑）
 + 「良い人生だった」と確信を持って受け入れられる力
 - 死や衰えへの恐怖

老年期（75歳～）
 不滅 v s 絶滅
 → 自信（or 危惧）
 + 自分の死から始まる時間の認識
 + 世界は永遠に続く
 - 自分の死を恐れ、死後は何も残らない



23

第2節 子どもの発達的特徴

支援の目標とは？
 表面的に「できないこと」を「できるようにする」ことではない

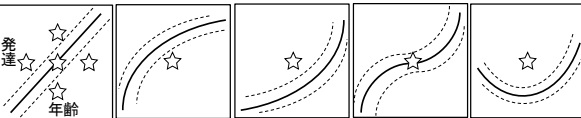
- 「できない」理由そのものの発達を促す

例：物の名前を1つの名前で表現している場合

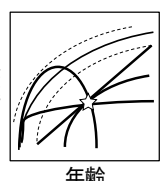
- 認識・言葉の理解の問題
- 興味関心の狭さの問題
- 意欲の問題
- 発音・発声の問題

24

「気になる」とは、どういうことか



発達に関する知識・子ども理解・(子ども像)・(理念)



- ・今までどうだったか
- ・今どうなのか(☆)
- ・これからどうなるか(見通し)
- ・これからどうなってほしいか(希望)

25

25



26

この子は「気になる」子？

この子と同じ行動を

- 1歳児がしていたら？→
- 3歳児がしていたら？→
- 5歳児がしていたら？→
- 小学生がしていたら？→

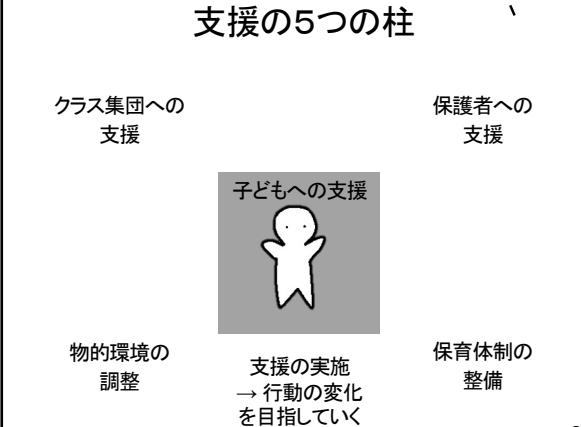
なぜ、「気になる」のか？

「なんとなく」なのか「根拠がある」のか

27

27

支援の5つの柱



28

28

- 中・長期的目標（望ましい発達を目指すために）
生活や遊びを通しての子どもの育ちの様々な広がり
の可能性に応じ得る包括的な表現が望ましい
→ 1年または数年先（就学）を見通す
- 短期的目標（当面の課題を達成するために）
中・長期目標を段階的に達成していくための目標。
より具体的な表現・評価可能な表現が望ましい
→ 数ヶ月から半年（学期）

29

29

第3節 保育カウンセリングにおける基本的な心構え

受容と共感

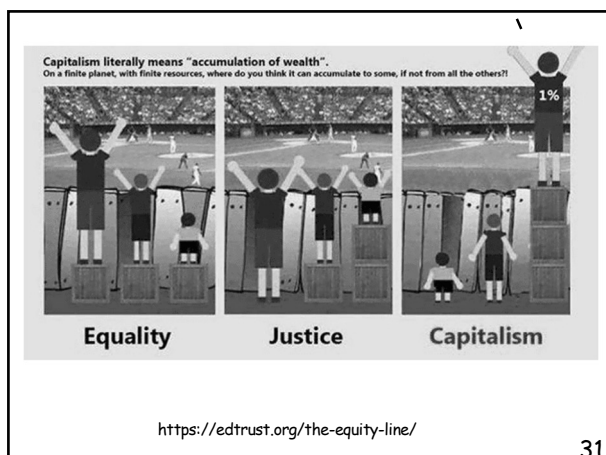
- 「子どもを受け入れる」とは
- 「目線を子どもと同じにする」とは
- 「共感」と「解釈」

柔軟な対応

- 「一人一人に合わせた」を考える
公平と公正

30

30



31

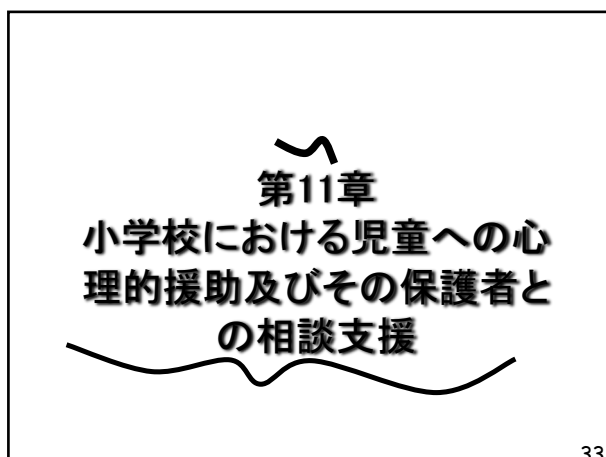
第4節 保護者との相談支援

- 子育てに関する「情報源」の変化
- 子育てに関する「悩みの共有の場」の変化
- 保育者・教師の「役割」の変化

Keyword

「集中」と「分散」
「コーディネーター」としての役割

32

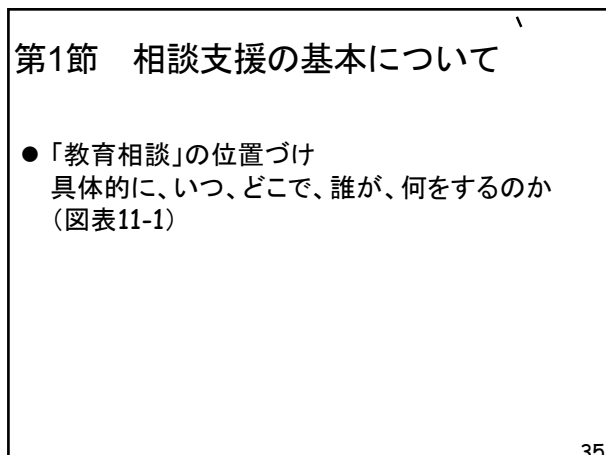


33

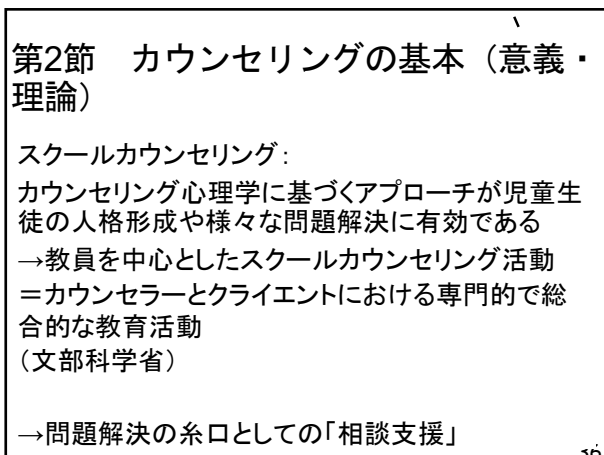
第11章のポイント

- 相談支援の基本について
- カウンセリングの基本(意義・理論)
- カウンセリングの3つの様態
- カンセリングの基本的な方法
- カウンセリングのプロセス

34



35



36

第3節 カウンセリングの3つの様態

- 治療的カウンセリング
専門家との連携
- 予防的カウンセリング
日常的な子どもとの関わり・観察
気軽に相談できる体制
- 開発的カウンセリング
全ての子どもを対象(発達課題の達成)

37

37

第4節 カウンセリングの基本的な方法 (受容的態度と共感、傾聴)

ラポール

相互に信頼し、安心して交流できる関係が成立していること、ところが通い合い相手を受け入れていて心地よい人間関係

→「ラポール」を形成するために必要なこと、とは

38

38

第5節 カウンセリングのプロセス

- リレーションづくり
- 問題解決に向けての共同作業
- 事実や問題の理解
- 目標の明確化
- 行動の支援・環境調整

「教師のみの力量に依存するのではなく」
→「教育相談」における「教師」の位置づけ

39

39

次回：10/30（水）

- 第12章：相談支援の実際①
- 第13章：相談支援の実際②
- 第14章：相談支援と家庭・学校・地域との連携と
相談支援(幼・小の連携、親との連携)
- 第15章：相談支援の課題と対応
- まとめ(レポート・試験について)

ありがとうございました☆

40

40